

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2013年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院	文学研究科	英米文学専攻
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・英米文学専攻 博士課程後期課程2年	朝倉 さやか 印	
<b>指導教員</b>	所属・職名	氏名	
	文学部文学科英米文学専修・教授	藤巻 明 印	
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	<b>個人・共同の別</b>	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 共同 名
<b>研究課題名</b>	ロバート・フロストとニューイングランド社会の関係性		
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・英米文学専攻 博士課程後期課程2年	朝倉さやか	
<b>研究期間</b>	2013 年度		
<b>研究経費</b>	(支出金額) 166 千円 / (採択金額) 200 千円		

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

アメリカ文学の中で、20世紀初頭から中盤にかけて活躍した詩人、ロバート・フロストを取り上げる。本研究ではフロストが社会への順応を望んでいた根拠とされることの多いフロストの資本主義への信頼を、フロストがニューイングランド社会に順応するためのきっかけと捉えなおすことによって、ニューイングランドを代表する詩人と考えられてきたフロストが、実はニューイングランド社会への葛藤を抱いており、その葛藤を詩人として資本主義を信頼することによって打ち消し、社会へ順応しようとしたことを明らかにする。そしてこのことによって、「アメリカの国民詩人」として一面的にとらえられがちなフロストの多面性を提示する。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ ロバート・フロスト ] [ ニューイングランド ] [ 労働 ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

本年度はニューイングランド社会における資本主義や労働倫理に対する労働倫理に対するロバート・フロストの姿勢を明らかにすることを目的とした。フロストの作品の中でも特に 1914 年出版の『ボストンの北』(*North of Boston*)に収められた作品を中心に取り上げている。フロストの作品はその抽象性や曖昧さが特徴とされるが、一方で対話詩と呼ばれる形式の作品には、ニューイングランドの人々の暮らしが具体性を持って描かれており、社会背景を読み込むことも可能である。そこでこの対話形式の作品が初めて収められた詩集である『ボストンの北』をテキストとして選択した。

## 1. 産業資本主義社会批判とニューイングランドの理想化

Joseph Conforti はニューイングランドの風景について、白く塗られた教会と農場を強調し、実際には多く存在していた工場を意図的に周縁化することで、実際の産業化を覆い隠し秩序と調和を保った新世界としてのイメージを作り上げてきたと指摘し、19 世紀以降そのイメージを作り上げた作家・芸術家として、特にフロストを名指ししているが、一方で Tyler Hoffman はフロストの労働者に対する同情を読み取ることでそれに反論している。そこで本論ではフロストの“*The Self-Seeker*”という、労働災害の補償金交渉の場面が描かれた長編の対話詩をとりあげ、ホフマンが明らかにした機械産業主義批判とその曖昧化に加え、そのような社会に生きる人々の現実との葛藤に対するフロストのまなざしを明らかにしていく。

この作品は工場労働中に事故に遭い、足をけがした労働者が補償金交渉に訪れる労働者を待つ場面で始まる。友人の反対にも関わらず、労働者は企業側の提案通り補償を受け入れようとする。労働者は補償金を受け取ることを「足を売る」と表現し、自らの身体を金銭と交換可能な物体へと貶める。そしてそれは企業に逆らうことを許さない村落共同体による個人に対する抑圧の結果でもある。

労働者は補償を受け入れることを「足を売る」と表現しながらも、自らが探しだす貴重植物については「売ったりはしない」と明言し、自然を資本主義から解放された一種の理想社会として語る。しかしそのような夢は企業を代表する弁護士によって打ち切られ、貴重植物すら市場で売買される商品であり、労働者が夢見るような金銭の交換によって成り立つ資本主義から逃れた理想など、自然にもどこにも存在しないことが強調される。

このようにフロストが描く労働者は資本主義社会の被害者と位置付けられるにも関わらず、労働者自身は企業や社会自体を批判することはなく、企業や共同体と争うことを避けようとする。一方で労働者の友人は企業を批判し、補償を受け入れることに反対する。作品は労働者と友人の確執によって展開するが、この確執は資本主義社会をありのままに受け入れるか批判するかという葛藤でもある。詩人自身は、友人のように資本主義を批判するよりも労働者のように社会を受け入れる姿勢を支持しているようである。だが二人の確執を描くことによって、曖昧化されてはいるが資本主義社会に対する批判を織り込んでいることは確かだろう。

コンフォルティはフロストが意図的にニューイングランドの風景から工場を周縁化してきたと指摘するが、1999 年にホフマンが明らかにしたように、この「自己探求者」のような工場労働者をテーマにした作品をフロストは書いている。これらの作品が文芸批評家によって頻りに論じられるようになるのは 2000 年を過ぎてからであり、「理想的なニューイングランドを描いたフロスト」像を、批評家が作り上げてきたとも考えられる。またフロストが労働者をテーマにした作品を詩集から外したことは、フロスト自身が「理想化したニューイングランド」を演出していたとも考えられるだろう。

「自己探求者」では工場での労働災害によって人間性を失い、企業や共同体によって抑圧される個人の姿が描き出されている。このように理想化されたニューイングランドからフロストが描いた風景を切り離し、あえて曖昧にするフロストの姿勢やその理由を明らかにしていくことは、フロストとニューイングランドの関係を考え直すことへとつながっていくだろう。

## 研究成果の概要 つづき

## 2. 『ボストンの北』に描かれた反抗者たち

Peter Stanlis は、フロスト作品を理解する上でフロストの二元論が重要であることを強調し、同時に、フロスト作品で描かれる二つの物事のあいだでの対立は、どちらの側にも完全な勝利や完全な敗北がないこと、最終的回答は得られないことを指摘している。確かに曖昧さが特徴と指摘されるフロスト作品において、完全な勝利や完全な敗北を見出すことは難しく思われるが、そのなかにも「部分的な勝利」や「部分的な敗北」を見出すことはできるのではないだろうか。ここでは『ボストンの北』の対話詩の中から“Death of the Hired Man”、“Blueberries”、“Housekeeper”の 3 篇を取り上げ、作品中にあらわれる二項対立について考察している。なおこの 3 篇はある二人の人間が別のある人物について議論する、という構造を持つ点で共通する。そこで 3 篇それぞれにおける二項対立の内容を明らかにし、その対立に対する詩人の姿勢を明らかにする。

まず「雇い人の死」は農場主夫婦が年老いた男を再び受け入れるかどうかで対立する。この男は過去に夫を裏切って余所へ移ったりしていたため、男を受け入れることは道理に反することであると夫は反対する。一方で妻は、夫が体現する正義とは対照的に、慈悲を持って受け入れようとする。この夫婦間の葛藤は、一度道理を外れた人間、労働に携わる能力をもちや持たない人間に対して、どのように接していくべきかを論じるものでもある。結論が出る前に男の死によって二人の葛藤は中断するが、詩人は妻の立場に共感している。これはフロストが、社会的逸脱者に対して罰ではなく許しを持って接することを望んでいるのと同時に、それが難しいということをも表している。

「ブルーベリー」もまた社会的逸脱者を中心とした夫婦間の葛藤を描いている。このとき問題になるのは、労働によってではなく、他人の土地に実った果実で子どもを養っている男をどうとらえるかということである。夫は、働くことなく他人のものであるはずの果実を独占する男を批判し、男の子どもたちにもまで批判を向ける。しかし妻は、男のような生き方は自然の恵みを受けることであって、批判するようなことではないと擁護する。そして妻による語りの中で、男ではなく夫こそが他人のものを盗む存在と読みかえられ、最終的には夫自身が自分の視線を泥棒のものとして語ることで、罪のイメージは男から夫へと移動することになる。ここでは労働に携わることのない男に対して夫が付与していた罪を妻が反転させることによって、妻が社会的逸脱者である男を擁護しているのである。

「家政婦」では女性と内縁関係を結んでいる経済力のない男を中心に、女性の母親と男の隣人が男を肯定的に捉えるか否かについて議論している。女性の母親が批判する男の要因とは、女性と内縁関係を結びながらも結婚をするつもりも子どもを作るつもりもないという結婚制度に反した考え方と、農場を管理する能力がなく家庭の内外両方の仕事を女性に押しつけ、家計を女性の稼ぎに頼っていることである。このような男の考え方や生活は結婚制度に反抗するものであり、同時にジェンダーの役割を混乱させるものである。男を批判する母親に対して、隣人は、女性も母親もジェンダーの役割が混乱した環境を好意的に受け入れていると指摘し、男を擁護する。隣人と母親の議論は平行線のままであり、詩人の共感がどちらにあるのかを判断することは難しい。しかし結婚制度やジェンダーの役割を攪乱する男の存在を批判するだけでなく、男性の立場から肯定的に捉える見方を提示していることは重要である。

これら 3 篇を比較すると、男女の二元論の対立は社会的逸脱者とどのように関わるのか、逸脱者の存在を罪とするのか否かという議論になっていることがわかる。そして女性の視点を通して逸脱者が擁護された際には擁護者に詩人の共感が寄せられていたのに対して、男性の視点を通して擁護されたときには、詩人の立場がはっきりと明示されないという差異が現れる。これは本来擁護すべきではない人間を擁護しようとしているために、フロストが男性として結論は明示せず、女性登場人物を通じて擁護することで自身の意図を隠蔽しつつ提示したのだと考えられる。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

④その他 (学会発表)

2013年度 立教英米文学会 2013年12月21日 (立教大学)

「Robert Frostが描いた反抗者たち——*North of Boston*の対話詩を中心に」